

近代建築研究と創作

—山形政昭の住宅建築—

芹澤秀近



山形政昭 長崎の家 1992年

はじめに

大阪芸術大学建築学科教授山形政昭は、近代建築の研究、特にヴォーリズ建築の研究者としての知名度は高いが、建築家としての力量については広く知られていないように思う。ここではそうした山形氏の建築家としての仕事を紹介しながら、彼の学と芸がどのように融合したのかを探ってみたい。なお、文中での敬称は略させて頂いた。

山形政昭について

山形政昭は1949年大阪生まれ、住吉高等学校を卒業後、京都工芸繊維大学建築学科に進学した。建築設計を志しつつも大学院では、建築史学教室の中村昌生博士の下で学び、研究室での住宅建築、茶室の実測調査に進んで参加したことで、和風建築への関心を深くしていった。

建築設計について山形氏は、「昔、伯父が大阪で建築事務所を営んでおり、少年の頃から建築と設計は興味の対象であった。大学では設計の課題より、建築事務所でのアルバイトに熱心だった覚えがある。そんなことで、実務経験は無いが、設計は自然に覚えた。」と語っているが、そうした若い頃の経験が後々役立つことになる。

1974年、当時日本建築史を教えていた中村昌生の後任として大阪芸術大学に助手として着任した。建築学科長で建築家の高橋兢一の標榜する建築設計教育と、当時着々と進む大阪芸大キャンパスの建築に向きあうなかで、高橋氏から建築において最も重視されるシャープなプランとセクション、追及されたディテールなどなど、多くのことを学ぶことになる。

山形氏が着任後の数年間におこなった二つの研究には興味を引かれる。一つは、1975年夏に多量かつ未知のW.M.ヴォーリズ建築図面が本学建築学科に収蔵されたことをきっかけに、ヴォーリズの建築研究に本格的に取り組み、約800件の設計図面を整理、確認したことである。

もう一つは、中村昌生による著作『茶室大観』（創元社）、

『茶室百選』（淡交社）の全図版作成を担当したことである。日本建築、とりわけ茶室については中村昌生の下で、非常に恵まれた建築調査を経験し、木造の空間構成と意匠を学んでいる。この頃、中村昌生は古建築研究を踏まえた創作活動にも盛んに取り組んでおり、そうした設計活動について学ぶことも少なくなかったようだ。

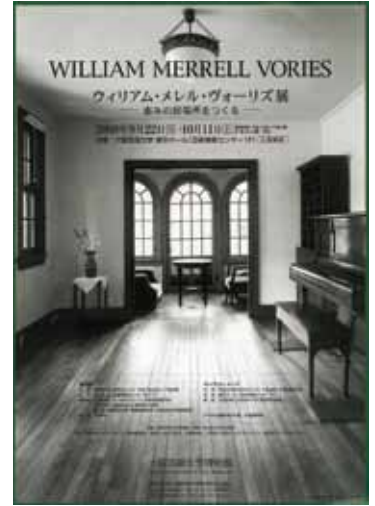
1974年は、日本建築学会に「大正・昭和戦前建築調査委員会」が設置されるなど、その頃から近代建築研究が盛んとなり、明治建築、大正建築などの全国的調査も進められ、ヴォーリズの建築が研究者の間で徐々に関心が持たれるようになった。そうした近代建築の全国調査は『日本近代建築総覧』（日本建築学会編1980および90）として刊行され、分野を同じくする研究仲間との交流も山形氏にとって幸いであった。

1980年、山形氏はヴォーリズ研究の最初の成果を「ヴォーリズと阪神間近代洋風住宅」（『ひろば』190号）で発表し、さらに同年、大阪芸術大学研究紀要『藝術6』に「ミッションリー建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズを巡って」を執筆している。その後、全国に所在するヴォーリズ建築の調査に取り組み、『ヴォーリズの住宅』（1988）、『ヴォーリズの建築』（1989）にまとめ、さらに学位論文『ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築をめぐる研究』（1993）として集成し研究に一区切りをつけた。

2002年に本学に博物館が開設されると、本学に収蔵されているヴォーリズの建築図面は、2003年本学博物館で「ヴォーリズ建築図面展」として企画展示され好評だったため、2008年春の『ウィリアム・メレル・ヴォーリズ展』につながり、さらに秋には本学博物館でそれが巡回展示された。

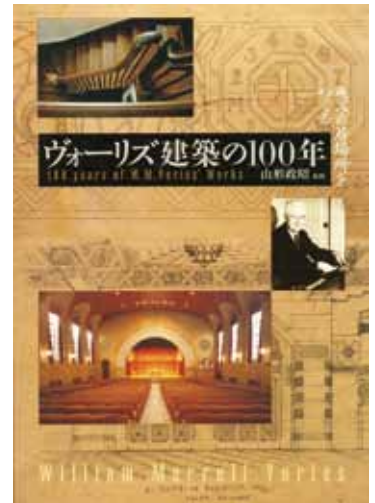
近代建築調査では、1998年より山形氏は大阪府教育委員会による近代建築の総合調査に主体的に関わることとなり、府下の建築史研究者との共同作業による『大阪府の近代和風建築』（2000）、『大阪府の近代化遺産』（2007）などを刊行し、その評価をもとに種々の府下の文化財指定、登録が進められていった。

そうした折、1995年から大阪市中央公会堂の保存再生事業が推進されることとなり、山形氏は2002年の竣工まで建築歴史分科会委員として関わっている。また近在の富田林市で



も長く文化財保護委員を務め、同市に寄附された明治の町屋（旧田中家住宅）を公共施設として再生する設計提案を行うなど、多くの成果を残している。

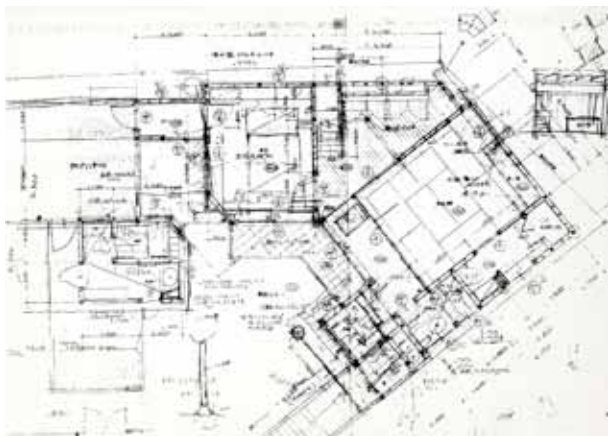
上図左)N邸(大阪 堺)1974年に設計した最初の住宅
 上図右)大阪芸術大学博物館での「ウィリアム・メレル・ヴォーリズ展」
 ポスターと図録、2008年秋
 ポスターデザイン 田村昭彦(大阪芸術大学教授)
 下図左)旧朝吹家別荘の移築再設計監修(2007~08年、軽井沢)
 下図右)旧田中家住宅修復計画基本設計(2010~12年、富田林)



山形政昭の住宅設計

山形政昭の建築思想を考える場合、彼の考えが最も良く表出している作品のひとつに、かつて大阪芸術大学文芸学科長であった美学者山田幸平の住宅がある。山田氏は「山形政昭の建築は豪快かつ繊細である。」と語るが、この言葉が発せられた背景を理解するために大阪枚方と長崎の山田邸を訪ねた。

山田幸平と山形政昭の出会いは、山田氏が大阪芸術大学の文芸学科長時代に、当時建築学科長であった高橋兢一から「自宅を鉄筋コンクリートにするのなら僕が設計をやるよ」と言ってくれたが、私も家内も木造が良いと言ったら、「研



究室に名手がいるから」と、山形氏を紹介されたことに始まる。

山田氏が設計を依頼したのは、先ず枚方の家に離れを増築する事からスタートし、長崎の家へと続く。長崎の家の敷地は50年ほど前に東平哲弥(洋画家)のアトリエであった。広さは200坪ほどで、それをもらい受けて別荘のようにしていたが、長く使っていると不便になったり、アトリエだったので住みにくい所もあったらしいが、大村湾に面していて景色が素晴らしい。東平哲弥の師である長崎出身の画家野口彌太郎は、建築家丹下健三と共に訪れた時、丹下氏がこの素晴らしい景色を讃えたことがあったという。山田氏はそういう場所での新たな書斎の設計を山形氏に依頼することを決めたのである。こうして長崎の家は昭和63年から設計に1年をかけ、平成元年に完成した。もとは茶室とアトリエであったが建て替えた山形氏設計の家には茶室は無い。ヴォリュームの有る主屋の一角に玄関を開く豪壮な構えであるが、奥に離れのような静かな和室があって庭に開かれている。山田氏は「風景を見るという角度からすると今回の家は、特に東側の二階か

らの景色が素晴らしい。大村湾が二つの半島の間に入りておりそこから太陽が昇る。建築家の丹下健三さんがここに来たとき、この土地の風景がすごいといったのはそこだと思っております。」と語るが、本当に二階からの景色が素晴らしかった。二階の広間には彫刻家木内克の彫刻と日本画家木本大果の手による大きな絵が掛かっており、その絵は、かつて山田氏が数年間を過ごしたパリの光景かと思われる。

山形政昭は自分の住宅設計に関して「大層な設計思想はもっていませんが、住宅は屋根からイメージします。屋根の形態が建物の質と場所性を表し、象徴的に言うと屋根の下に人間的空間が生成されると考えています。プランは、目的に従って整理する。留意すべきは部屋をつなぐ方式、階段などの接続空間が要点で、それが建築を決める、と思っています。ですから、屋根は大切に、屋根裏空間をどう生かすか、というところに注意を払っています。」と言っているが、山田氏の長崎の家にもこうした考え方がはっきりと見て取れるのである。



前頁左上)山田邸離れ(1983年)
前頁左下)山田邸平面図、主屋西側
の三角の庭内に計画された離れの書斎
前頁右上)階段室
同右下)8畳間

左図)山田邸8畳間正面
床の間の掛軸は東大寺管長
上司海雲書「雲無心」

山形建築にみるヴォーリズ

ヴォーリズの建築、とりわけ住宅は一般にも好感をもたれるものがあり「どこか既視感があり親しみやすく、居心地のよい建築」といわれる。出窓に設けた長椅子のあるコーナー、食堂隅の小さな暖炉、登りやすく手摺のカーブが美しい階段、そしてシンプルな装飾をもつ照明設備など、工夫された意匠が多い。こうした建築に流れるヴォーリズの設計思想は、プロテスタンティズムというキリスト教精神から導かれた実践的な改革精神に由来し、アメリカの伝統に根ざすものであると同時に、日本を愛し、和風への共感が独自の建築を生み出したといえよう。いずれにせよ生活のための建築とデザインが、ヴォーリズの建築の有する時を超えたテーマであり、山形氏にとってそれは単に研究対象としてだけでなく、設計創作の面からも注視したい建築となっていた。山田幸平、山形政昭の対話からそれを見てみよう。

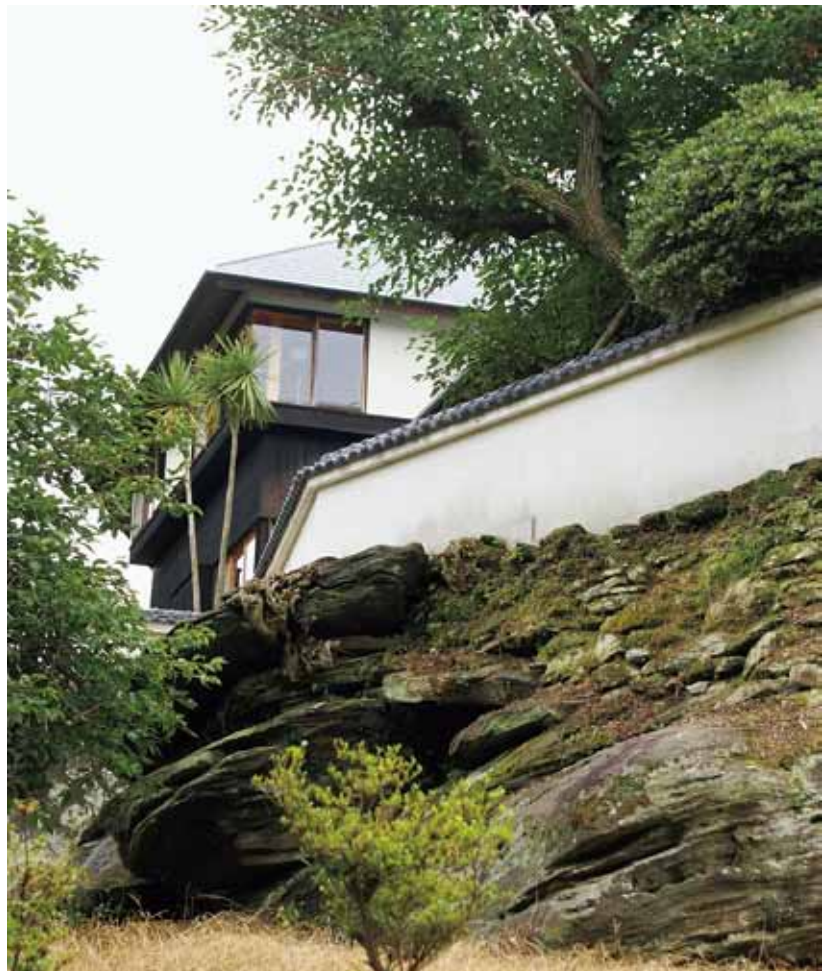
山田:ヴォーリズのおいもあるんです。それは表面からは普通は見えないのですが、関学や山の上ホテルにヴォーリズのおいがあるんです。住んでいるといつかふっと山形先生の建築に同じようなおいがあることに不思議と気づくんです。

山形:それは外との繋がりとか自然らしさだと思います。

山田:そう。それは僕の目には見えませんが、繋がりだと思う。たとえば、日本建築の有名な旅館に行っても、いつも山形先生の作品の中に住んでいるせいか、日本建築ということ強くは思わないんです。それが住むようになってからの一番大きな変化だと思うのです。そして、住んでみると建物が最初繊細に見

えるんですが、しばらくすると豪快な面が見えるんです。不思議ですがこれが一番言いたい所なんです。繊細さがあるんですが暫くすると、なにか切り捨てたような豪快さが出てくるんです。それが不思議な感覚なんです。山形先生が大学で学ばれた中になにかそのような先生がいらしたのか、それともご自身の個性なのでしょう。

山形:豪快さがあるとは私自身も全く気づいていませんでした。僕の師匠は中村昌生先生で、日本建築とりわけ茶室の大家と言われる方で、そこで茶室とか数寄屋を学んできました。その中村先生と大阪芸大にいらした高橋誠一先生が大変懇意で、最初芸大では中村先生が日本建築を教えておられたのですが、私が芸大に勤めることに(94ページへ)



「美学者の家」

大都会のど真ん中に育った私は、長じるにつれて、大自然の息吹に包まれた土地に、書齋を持ちたいと願うようになった。三十代の終わりに、菅平の白樺に包まれた土地に小屋を建てたが、真冬の雪の深さに閉口してこの小屋をあきらめた。ある時、あなたの家を造るとなるとこうなるのだと言って、高橋執一名誉教授がコンクリートで小さな要塞か美術館のような模型を見せて下さって、実は、あなたから生活の具体的な匂いがないので、こうなったのだと笑われた。自分は杉の匂いのする書齋を持ちたいのだと言うと、じゃあ日本建築の名手を紹介すると言われて、山形さんが私の前に現れた。スペイン旅行のグラナダで知り合った画家の長崎のアトリエ敷地をもらい受けて、山形教授に書齋を造ってもらうことになった。高橋先生のイメージを杉の木で引き受けて、外観は小さな城のようなイメージを持つが、暮らしてみると、さすがにヴォーリズやウィリアム・モリスの研究者らしく、天井や壁面や階段に、繊細な雰囲気がかび上がるようになる。恩師の井島勉先生が、美学をやる者は、能う限りの大膽さと、能う限りの繊細さが必要だと、ある時、葉書を下さったが、書齋だけはどうか、そのような雰囲気をいつもたたえている。

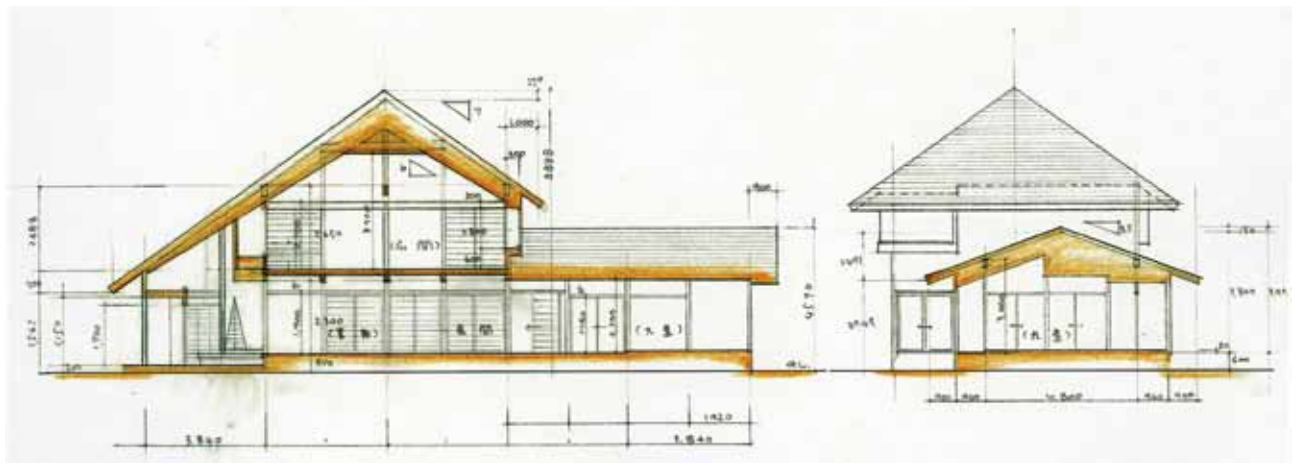
山田幸平

前頁)長崎の家(1992年)

大村湾を東に望む高台の岩盤上に建ち、
眺望の良い2階広間の窓が見える。
庭内の高木は初夏に赤い花を咲かせる海紅豆。

右図)2階広間からの眺望

下図)断面図



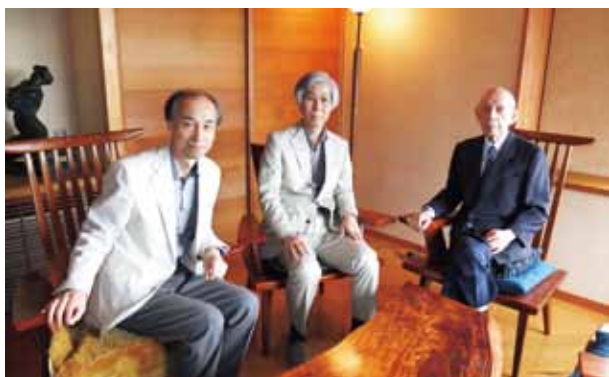
長崎の家 1992年



左上図) 屋根が深く差しかかる玄関前庭
左下図) 長崎の家訪問時のスナップ(2013年6月)
(左から山形氏 筆者 山田氏)

右上図) 階段ホール

右下図) 2階広間に置かれた木本大果作「ノートルダム」





上図) 1階8畳間北東面
下図) 1階8畳間南面



決まったら中村先生はさっさとお辞めになりました。先生は最近では京都迎賓館の建築などもおやりになっています。

山田:高橋先生は豪快に見えて実は繊細、それで自分に無いものを山形先生に見いだした。ご破算になってしまいましたが、祇園の町屋をリノベイトする話があった時に、直ぐに山形さんに声をかけましたね。長崎の家も、外観などは豪快なのだが、少し目に慣れてくると繊細さが見えてきてその咬み合わせが面白い。それが気に入っている証拠なんです。小ぢんまりとした玄関を通過して中に入ると、玄関に入った感覚は豪快、だんだんその中に繊細さが見えてくる、そういう建物なんです。それが気に入っています。

山形:木の家は竣工の時より年数が経った今の方が木は美しいですから、始めは木の色が白いが年数が経つと落ち着く。格天井の木目も深くなり豪快になっていきます。

山田:格天井は長崎にも有る。枚方の家の中二階への階段、長崎の家の階段、これらは山形先生の建築の中の様式の一つなのかもしれないですね。

山形:その部分はヴォーリズが入っているかも知れません。階段がただの通路では無く、使いながら何か場所が出来る。そして階段が上がりやすいんです。

山田:気づかなかつたけれども階段からヴォーリズを感じるのかも知れませんね。その問題を解き出すと長くなるが、心齋橋大丸の中二階の階段、東京の山の上ホテルの旧館の二階へ行く階段、食堂の階段、関学のヴォーリズが作った階段、そうしたなかに何か山形先生が見つかった物があるのかもしれないと思いました。

まとめにかえて

山形政昭と交流を持つ人々との間で、様々な住宅作品が生まれている。遡っては大阪芸大でピアノを教えていた遠藤一枝邸は、山形氏の調査で直ぐにヴォーリズ的设计と分かり、特色ある洋館の維持修理を助言しながら、増築の設計をしている。その後音楽関係のF氏邸、M氏邸と広がり、そして



上図)加茂の家(回りは緑であった1994年の建築時)
下図)加茂の家スタジオ(音響設計は筆者)





上図)松本邸離れ(音響設計は筆者)

デザイン学科のN氏邸では基本設計を山形氏が行い、実施設計は、夫人が演奏学科ヴァイオリン教授である青砥氏と一緒にやっている。先に記述した山田幸平邸、そしてこの小論を書くきっかけになった私の小さな加茂のスタジオ。こうした作品には山形氏の「屋根からイメージを広げて人間的空間を創造していく」という理念があり、その中にヴォーリズの「生活のための建築とデザイン」が生きていると思うのは私だけではないだろう。それらを考え合わせると、山形氏のなかで学と芸の融合が起こっているのは確かである。

最後になりましたが、枚方や長崎のご自宅をじっくり拝見させて頂いたばかりか、素晴らしい文章まで寄稿して下さいました山田幸平先生のご厚情に深く感謝申し上げますとともに、執

筆に全面的に協力して頂いた山形政昭教授に厚く御礼申し上げます。

山形政昭の主要作品および研究

■ 設計作品

- 1974・N邸(堺市)
- 1980・小吹台の家(河内長野市)
- 1983・山田邸離れ(枚方市)
- 1984・T邸(八幡市)
- 1985・A邸(名古屋市)
- 1986・K邸(富田林市)
- 1988・向陽台の家(富田林市)
- 1992・長崎の家(長崎市)
- 1994・加茂の家(木津川市)
- 1995・松本邸離れ基本設計(大阪市)
- 1998・N邸基本設計(京都市)

■ 主要論文・著書

- 1974・「近代和風住宅の造形に就いて」京都工芸繊維大学修士論文
- 1980・「ヴォーリズと阪神間近代洋風住宅」『ひろば』
- 1980・「ミッションナリー建築家ウィリアム・M・ヴォーリズを巡って」『芸術5』大阪芸術大学
- 1983・「芦屋文化村の記」『芸術6』大阪芸術大学
- 1984・『近代日本の異色建築家』朝日選書261 朝日新聞社／共著
- 1988・「日本の近代と建築—キリスト教会建築の展開」『月刊文化財』
- 1988・『ヴォーリズの住宅』住まいの図書館出版局
- 1989・『モダン・シティー・京都』淡交社／共著
- 1989・『ヴォーリズの建築』創元社
- 1992・『新しい住宅を求めて』KBI出版／共著
- 1992・「建築家笹川慎一をめぐって」『芸術15』大阪芸術大学
- 1993・『ウィリアム・メル・ヴォーリズの建築をめぐる研究』学位論文
- 1994・「建築家小川安一郎について」『デザイン理論33』意匠学会論集
- 1997・「美術工芸的住宅の開花」『阪神館モダニズム』淡交社
- 1999・「大阪市中央公会堂の建築」『芸術22』大阪芸術大学
- 2002・『ヴォーリズの西洋館—日本近代住宅の先駆』淡交社
- 2007・「近代大阪の建築遺産」『大阪府の近代化遺産』大阪府
- 2008・『ヴォーリズの建築100年』創元社／共著
- 2010・『和歌山県の近代和風建築』和歌山県教育委員会／共著

(写真:山形政昭・芹澤秀近)

